

単元名:根拠の適切さを考えて書こう

～「学校で多文化共生を実現するために私たちができること」について意見文を書く。～

氏名:栗津 美沙	学校名:京都市立朱雀中学校	
担当教科:国語科	実践教科:国語	
時間数:5時間	対象学年:2年	人数:29人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標

「学校で多文化共生を実現するために私たちにできること」について、
多様な立場を想定し、適切な根拠を挙げることで、自分の意見が効果的に伝わる文章を書く。

【2】 単元の評価 基準	(ア) 知識・技能	意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。
	(イ) 思考・判断・表現	根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫している。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切に、思いや考えを伝え合おうとしている。
【3】 単元設定の 理由	本単元は、地域や社会全体で話題になっていることや問題と感じていることを取り上げ、適切な根拠を挙げて意見を書くというものである。 近年本校では、海外からの転入生が増加している。生徒たちは、異なる文化的背景の中でも、教室の中で助け合う姿が見られる。一方で、文化的な違いを受け入れられない場面があったり、海外からの転入生本人が、学校生活を送る上で抱える課題が多く存在したりする。今後、日本への移民は増えることが予想されることから、生徒は多様なルーツ・文化的背景を持つ人と共生していく必要がある。 本単元では、外国にルーツをもつ子どもたちの学校生活上の課題について情報を集め、その課題に対して私たちができること(意見)を発信することをねらいとする。指導する上で、特に生徒が「自分ごと」としてこの課題について考えられるようにしたい。そのために、授業者がペルーで出会った浜田ケインさんの実体験を伝えることで、問題意識を持たせ、また外国にルーツをもつクラスメイトの立場になって考えさせるなどの手立てをしていく。また、意見や反論を様々な立場から考えることで、課題を多角的に捉える力を育てたい。 授業者がペルーで出会った通訳のフランクさんは、自身の日本移住の経験から、「差別は、知らないことへの恐怖から生まれる。反対に、同じところを見つけると仲良くなる。」と仰っていた。本単元を通して、まずは生徒に課題について「知る」きっかけとしてもらいたい。そして、国は違えど人間として本質的に同じであることに目を向け、多文化共生について考える一歩となるような授業を目指していく。	

【4】展開計画(全5時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	外国にルーツをもつ子が日本の学校で直面する課題について情報を集める。	○単元目標と、単元を貫く言語活動「学校で多文化共生を実現するために私たちができることについて意見文を書く」を確認し、学習の見通しを持つ。(※「多文化共生」の言葉の意味をおさえておく。) ○〈一人学び→班交流→全体交流〉自分が海外へ移住し、海外の学校で過ごすことを想像し、困りそうなことを想像する。 ○海外から日本への移住者の現状(データ)を知る。 ○外国にルーツをもつ子が日本の学校で直面する課題について情報を集める。	○ペルーの学校の写真を使って想像の手がかりとする。 ○浜田ケインさんの日本での体験を伝える。
2 本時	課題に対する自分の意見をもつ。	○〈班交流〉集めた情報を班員に共有し、分類・整理する。 ○〈一人学び→班交流→全体交流〉外国にルーツをもつ子が日本の学校で幸せに学校生活を送るために必要なもの・ことは何かを考え、取り組みのアイデアを出す。 ○挙げたアイデアの中から、課題に対する自分の意見を選び、一文でまとめる。	○ワークシート
3	反論を想定して、意見文の構成を考える。	○意見文の構成を理解する。 ○反論を想定して、それに対する自分の意見を考える。 ○意見文の構成メモを作る。	○教科書 ○ワークシート
4	自分の考えが伝わる文章になるように工夫して意見文を書く。	○既習の「接続語」、「指示する語句」を復習する。 ○「接続語」、「指示する語句」を使って、段落と段落をつなげる。 ○構成メモをもとに、600字～700字程度で意見文を書く。 ○自分の考えが伝わる文章か確かめ、推敲する。	○教科書 ○ワークシート
5	お互いの意見文を読み合い、学習を振り返る。	○お互いの意見文を読み合い、根拠の適切さについて、説得力があると思ったところや、改善点を伝え合う。 ○学習を振り返る。	

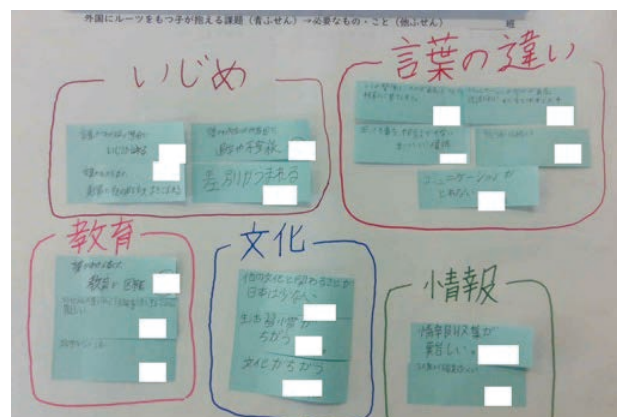
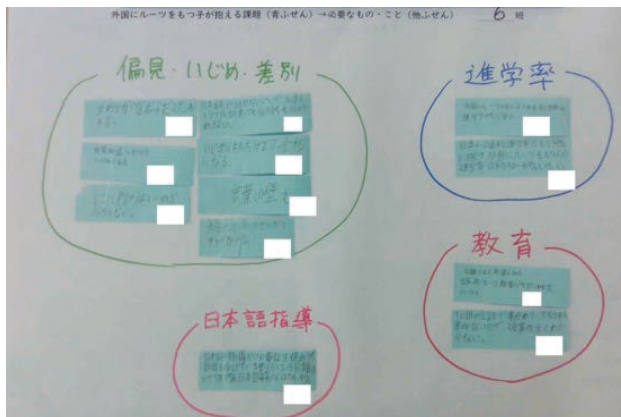
【5】本時の展開

過程	◆教師の指示・発問	指導上の留意点(支援)	資料(教材)																																			
時間	○学習活動 ・生徒の反応																																					
導入 (8分)	○前時の内容を振り返る。 ◆学校生活が楽しいと感じるときは、いつだろうか。 ・休み時間に友達と話しているとき ・授業の内容が分かったとき ・給食が美味しいとき ◆前回、外国にルーツをもつ子の課題について調べたように、私たちが「学校が楽しい」と思う瞬間にも、その子にとっては、困っていたり、楽しくなかったりするかもしれません。 ○本時の目標と学習の流れを確認する。 目標 課題(=学校で多文化共生を実現するために私たちができること)に対する自分の意見をもつ。																																					
展開1 (10分)	○〈班交流①〉日本へ移住してきた外国にルーツをもつ子どもの学校生活の課題について集めた情報を共有し、似ている観点ごとにグループ分けをして、整理する。(図1)	(図1)イメージ図 言語の問題 進路の問題 食文化の問題																																				
展開2 (20分)	○〈一人学び〉整理した内容から、日本へ移住した子どもが幸せに学校生活を送るために必要なもの・ことは何かを考え、ふせんに書く。 ○〈班交流〉自分のアイデアがどの立場からできることなのかを表に整理する。(図2) ◆表にまとめたとき、「学校が」や「教育委員会が」多かったり、「自分が」が多かったりしないでしょうか。空いているスペースに目を向け、様々な立場でアイデアを考えましょう。 ○〈全体交流〉各班の紙をまわして読み、いいなと思うアイデアに○をつける。	⑤課題の原因を考えて、アイデアを考えるように伝える。(例:偏見や差別の問題は、なぜ起こるのかを考えて、アイデアを出す。) ・「優しく接する」などではなく、具体的な取り組みや支援として考えるように伝える。 ・一旦実現性などは考えず、自由にブレインストーミングする。 ・下記のマトリックスに沿ってアイデアを挙げる。(図2) <table><tr><th></th><th>1週間以内に</th><th>2年生のうちに</th><th>卒業するまでに</th><th>20年以内に</th></tr><tr><td>自分が</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>クラスが</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>2年生が</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>生徒会が</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>学校が</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>教育委員会が</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>		1週間以内に	2年生のうちに	卒業するまでに	20年以内に	自分が					クラスが					2年生が					生徒会が					学校が					教育委員会が					
	1週間以内に	2年生のうちに	卒業するまでに	20年以内に																																		
自分が																																						
クラスが																																						
2年生が																																						
生徒会が																																						
学校が																																						
教育委員会が																																						

まとめ (10分)	○交流を通して考えたアイデアの中から、課題に対する自分の意見を選ぶ。 ○意見を支える適切な根拠を挙げ、一文でまとめる。	⑤ 下記の例文を提示し、本時の学習から、一文にまとめる。 ・「日本に移住した外国にルーツを持つ子どもには、○○な課題があり、…を必要としていると考えた。だから☆☆をするべきだと考える。」	
--------------	---	---	--

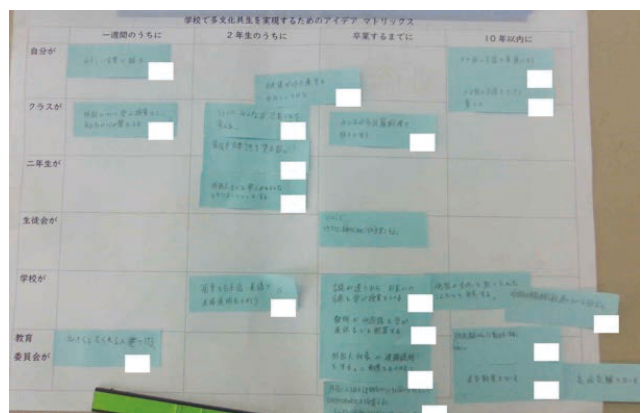
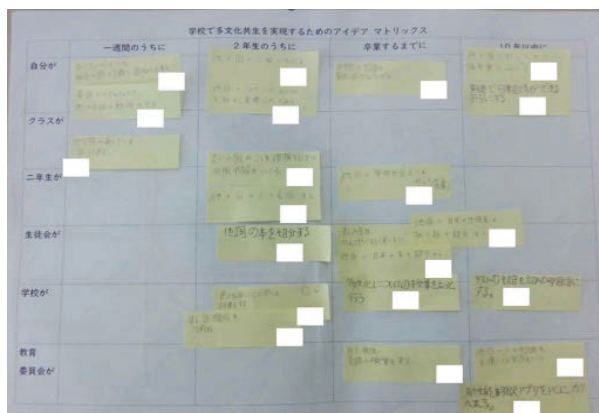
【授業実践の様子】

▼〈班交流①〉外国にルーツをもつ子どもが抱える課題を分類したもの



…偏見・差別・いじめ、言語、教育、文化、情報不足、進学率、食文化などが挙げられた。

▼〈班交流②〉課題に対して私たちにできることのアイデアを挙げ、マトリックスに整理したもの



- …「自分が」「一週間のうちに」外国にルーツがある子に対して優しい日本語で話す。
- …「クラスが」「一週間のうちに」掲示物を伝わりやすい日本語に書きかえる。
- …「学校が」「二年生のうちに」簡単な日本語・英語で進路説明会を行う。 など様々なアイデアが出た。

▼〈班交流②〉アイデアを出している様子。



…「学校に4ヵ国語くらい話せる人を一人置いたらいいんじゃない?」という意見に対し、「4ヵ国語(話せる人)はきつくない?」「それやったら日本語覚えられへんやん。」「難しいやつだけ翻訳してもらう。」などの意見が飛び交った。

【6】本時の振り返り

指導案の流れに沿ってスムーズに授業が進んだ。一方で、アイデアを出す場面では、一旦実現性などは考えずに自由な意見を出すことを想定していたが、生徒の視点ならではの自由で斬新なアイデアは少なかったように感じた。一般的に「正しい」と言われる意見だけではなく、本音を交えたネガティブな発言や、そこに対する議論などが本時でできるとより考えが深まったであろう。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

ここでは、生徒が書いた意見文を一部掲載する。

「多文化共生を実現するために」

私は、外国にルーツをもつ子どもが、楽しく安心できる学校生活を送るために、生徒会の挨拶運動を色々な国の言語で行うべきだと考える。

かめおか多文化共生センターのページに、外国にルーツを持つ子が過ごしていく上で、言語の壁にぶつかってしまうことが挙げられていた。また、それによるコミュニケーション不足から、誤解や偏見が生まれていくと分かった。

このような誤解などができると、文化や見た目の違いなどから差別につながってしまう。なので、コミュニケーションをとり、互いのことを知ろうと話しかけるきっかけをつくるのが大切だと考える。

私はこのようなことから挨拶運動を様々な言語で実施することを提案する。具体的には、朝、生徒会の取り組みとして行われている挨拶運動の中で、週の中で一日程度、挨拶を他国の言語でする、というものである。

他国の言語で挨拶をすることで、外国にルーツを持つ子の元の言語がきこえてきたときに安心できるだろう。また、ルーツをもつ子が学校にいない言語でも、外国の文化に興味をもったり、調べてみようと思うきっかけになると考える。

一方で外国語を生徒会の人みんなが覚えるのには時間がかかる、や、挨拶だけでは仲良くなれない、という意見も出てくるかもしれない。しかし、「おはよう」などの一言であれば、あまり時間がかからず、難しくなく、親しみをもてるのではないかと思う。また、仲良くなれないという点では、互いの文化に興味をもってきっかけをつくるのがこの提案の目的であり、活動を通して、仲良くなるための第一歩を後押しできれば良いと考える。

このように、私は、挨拶運動を通して外国にルーツを持つ子に安心できる楽しい学校生活を送ってほしい。コミュニケーション不足の解決は多文化共生につながるだろう。

「文化の相異」

私は、外国にルーツを持つ子どもが、外国にルーツを持つからという理由でいじめられてしまうことを防ぐために、日本とはちがう文化を知り、交流する「文化交流展」を校内で実施するべきだ考える。

この取り組みでは、みんなが他国の文化や習慣について調べ、様々な文化に触れることを目的として行う。みんなが他国について調べることで、外国にルーツのある人が、少数対多数の日本人という状況になって孤立してしまうことを防ぐ。同時に、本人の疎外感を軽減する。そして、「自分だけがちがう」と感じさせるリスクを減らすことができる。

株式会社サベイリサーチセンターが2022年に発表した二十歳以上の在留外国人の男女に行った調査によると、子どもがいる人の中で、子どもがいじめにあった経験があると回答した人は46.7%だった。そのうち、子どもがいじめにあった理由が「日本と習慣がちがうため」と回答した人は55.6%だった。

このような結果から、外国にルーツのある子どもの約半数はいじめにあったことがあり、その理由の多くは習慣や文化の違いであると分かる。しかし、国がちがえば習慣がちがうことは容易に分かる。それでもいじめがおきてしまう背景には、文化がちがうことを知らないということがあったと考えられる。

「文化交流展」という取り組みに対し、ちがう国の文化を目でみることにより、自他のちがいが露呈してしまうのではないだろうか考える人もいだろう。しかし、ちがいにだけ目を向けるのではなく、あくまで共通点を見つけ、ちがいも楽しむことを目的とした活動であるため、その点は問題ない。

これらのことから、他国の文化への無知さがいじめなどを引き起こしているため、様々な文化を知ることが大事だと私は考える。そのために、文化に触れる機会が必要である。だから、多文化共生への第一歩として「文化交流展」を実施するべきだ。

「食文化での多文化共生においてできること」※()内は授業者の補足。

僕は、外国にルーツをもつ子が日本の学校で過ごす中で食べ方や量などの食文化での課題がたくさんあるから、他の国の食文化について学ぶことが必要だと考える。

浦岡胃腸クリニック(のホームページ)には、「日本食は塩分である塩やしょうゆなどを多くくわえることで、外国人の人には合わないことが多くある。また日本食には揚げ物が多くて合わないことも多くある。」と挙げられていた。

このようなことから、外国にルーツをもつ子は日本食があわないし、食文化で困っていることがあるということが分かる。

僕はこのようなことから、外国にルーツをもつ子にも給食を楽しんでもらうために、週に二回ぐらい多国籍料理を出すことと、他の国の食文化について学ぶ会や本を置いたりすることを提案する。多国籍料理を出すことで給食時間が楽しくなり、生徒と会話するキッカケにもなると思う。その上に食文化の本や学ぶ会をすることで、学校全体でいろんな国の食文化について理解することができると考えられる。

しかし、外国の料理を作る上で、食料が足りなかったら学校全体で多国籍料理を出せないかもしれない。また、本が無かったり、学ぶ機会ができないかもしれない。確かに、完璧な料理は無理かもしれない。しかし、日本にある食料だけでも(使って)料理を出すことで、給食が楽しめるし、コミュニケーションの機会にもなると思う。

他の国には様々な食文化があると思う。僕は給食の時間だけでも楽しい時間を感じてほしいと思う。だからみんなにも他の国の食文化を理解したり少しでも食文化に関わってみてほしい。この関わりが多文化共生への一歩になるだろう。

また、外国にルーツをもつ転入生が書いた作文は以下である。作文は、自国の言語を日本語に翻訳し授業者がおおむね意味が通っているかを確認するという流れで書くよう指導をした。そのため、途中不自然な日本語があることはご了承願いたい。

「外国からきた学生に対して私が考えること」

多くの学生が日本の学校に来て、第一にしなければならないのは成績をとることや友達を作ることではなく、日本語ができるようになることです。考えてみてください。もしあなたが外国にいたとしたら？あなたにその国の言語を話せません。クラスメイトや先生が何を言っているのか分からないのは苦痛です。あなたはその国の言語を知らないの、誤解が生じます。人に誤解されるのはとても恐ろしいことです。この時、先生が外国人学生に日本の礼儀文化を教えれば外国人学生や日本のやり方を理解でき日本人に誤解をえることはありません。私が日本に来て一番適応するのが難しかったのは食文化です。例えば、みんなで食事をする時、あいさつのためにクラスメイトを待つ必要はありません。以上は多文化共生に対する私の理解です。彼らは生活の中で多くの困難を抱えているので、彼らを理解して尊重してほしいです。

学校へのアドバイス

まず、お互いの文化を理解し、自分の国の文化との違いを比較することができます。そうすれば、その後、外国人が理解できないところを理解できます。学校で重要なイベントがある時、何をするかを教えなければなりません。そうすれば、外国人学生は理解して実行します。しかし、彼らに伝えなければ、彼らはどんな重要なものを持っていくべきか分からず、先生に伝えたいが、自分は言語が分かりません。以上は学校に対する私のアドバイスです。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

- 本単元の振り返りに、生徒が自身の考えの変容について記述しているものがある。ここでは一部抜粋し、紹介する。
- ・「今回なぜ外国から来た子が悩みをかかえているのか知れました。今まで私は、なんで外国から来た子が戻りたいと思うのかとか、日本は暮らしやすくない?とか思っていたけど、この単元で、やっと理解することができました。住み慣れた自分の国から離れたくないという気持ちや言葉が通じない、どうすればいいのか分からないなどの不安があったのかなと思いました。外国の子の気持ちを考えるきっかけになってよかったです。」
 - ・「私はこの単元に入るまでは外国にルーツをもつ人たちへの課題などよく分からなかったけど意見文を書くためにインターネットで多文化共生について調べてみるとたくさんの課題があって、自分たちにも出来ることもたくさんあったので今回多文化共生について知れてよかったし、自分たちにできることは協力したいです。」
 - ・「[ぼくも最初は偏見などもあったけどこの授業を通して偏見がなくなっていき相手のことを知るの大事だと思った。]」

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容

(授業前)

上記の振り返りにも見られるように、本単元を学習する前は、外国にルーツをもつ子が抱える課題について「知らない」、「分からない」状態である生徒が多く、だからこそ中には偏見をもつ生徒もいたと考えられる。これは、外国にルーツをもつ子がクラスにいたとしても、その子の立場になって考えるきっかけが少なく、相手が抱える課題に目を向ける機会がなかったからであろう。

(授業後)

生徒が書いた意見文や振り返りには、異文化や相手を「知る」ことの重要性を書いたものが多くあった。それは、生徒自身が課題について調べ、外国にルーツをもつ子どもの困りや現状を知ったからこそ見えてきたことでもあるだろう。異文化・多文化共生の実現のためには、まずは相手の立場に立って考え、相手自身を「知る」こと、その重要性に気付いた生徒は多いと考えられる。

【8】自己評価

1. 苦労した点	多文化共生を「国語」で扱うため、あくまで意見文のテーマの一つという位置づけになってしまった。そのため、生徒は多文化共生を実現するためのアイデアを「頭」ではよく考えていたが、あくまで国語として論理的に文章にすることを目的とし、多くの生徒が似た意見に着地した。外国にルーツをもつ子どもが抱える困りについて、疑似体験をしたり、何度も繰り返し考えたりすることで得られるような「心」で感じる学びに至るには、教科の特性上、難しいと感じた。
2. 改善点	・人権学習と国語を絡めるなど、教科を横断して授業を行うことで、様々な視点から考えを深める。 ・生徒が掲げる理想的な意見に対する、現実的な反論について議論をする時間を十分にとることで、より考えを深める。 ・生徒の意見文で出たアイデアを実際に学校で実践することによって、授業での学びと実生活とのつながりを感じさせる。
3. 成果が出た点	外国にルーツをもつ子どもが抱える課題について、無知・無関心であった生徒が、今回の授業を通して課題について知ったり、考えたりするきっかけになったことが本単元での一番の成果であると考え。これから先、生徒が多様なルーツ・文化的背景をもつ人と共に生きるために、本単元での学びを生かして行動ができるようになれば、この授業実践においてこの上ない成果と言えるだろう。
4. 備考	多文化共生について考えるためには、「実際に自分が海外へ行ってみて、異文化の中で生きること」が最も効果的な学びであると考え。そうした意味では、日々生徒と接する授業者が、「海外へ行って異文化の中で感じたこと」を生徒に還元できたこと自体に意味があると考え。本授業のみで多文化共生について学びを深めることは難しいが、海外に興味や関心をもつきっかけを与えることができたのなら、幸いである。

添付資料(ワークシート):

二年国語科 ワークシート () 組 () 番 名前 ()

根拠の適切さを考えて書こう (1/5)

学校で「多文化共生」を実現するために、私たちができることについて意見文を書く。

《目標》 外国にルーツをもつ子が日本の学校で過ごす中で、直面する課題について情報を集める。

○ あなたが海外の学校で過ごすことを想像し、「困りそうなこと」を考えよう。

授業中は？ 昼食では？ 友達や先生とは？ どのように過ごしているだろうか？

○ 外国にルーツを持つ子が日本の学校で過ごす中で、直面する課題について情報を集めよう。

〈検索キーワード例〉 外国ルーツ 子ども 学校 課題 多文化共生 ・ ・ ・

			調べたこと
			出典
☆☆☆	☆☆☆	☆☆☆	信頼度

添付資料(ワークシート):

【確認】 ☐ 根拠となる事実は、客観的で、信頼性の高いものか。↑ ☐ 意見と根拠のつながりは明確か。↑ ☐ 予想した反論に対する意見は、自分の考えを後押しするものか。↑	〇 反論を予想して、それに対する意見を書こう。↑ ↑	〇 (まとめ) 自分の立場・意見を決める。↑ (例) 外国にルーツをもつ子が、日本の学校で過ごす中で、〇〇の課題があり、↑ ・・・が必要であると考える。そのため、私たちは学校で、☆☆をするべきだと考える。↑	《目標》課題に対して自分の意見を持ち、適切な根拠を考える。(2/5) ↑
---	--	--	---

参考資料:

「外国人の子供が日本の学校で」浜田ケイン(ペルーでの教師海外研修で出会った浜田ケインさんに頂いた資料)